

白居易「論太原事状三件」と 九世紀初めの河東道

札幌大学文化学部講師 高瀬奈津子

白居易が生きた唐代の後半期では、それまで辺境地帯に置かれていた節度使が、安史の乱の平定と地方の秩序回復を目的に中国内地にも設けられた。その後、軍事権と行政権の両方の権力を持って地方に割拠する藩鎮となった。朝廷にとっては、いかに地方藩鎮勢力を抑えて中央の統制力強化を実現するかが、政治上の大きな課題であった。白居易が官僚として活躍した憲宗朝では、即位当初から跋扈藩鎮に対して強硬な姿勢で臨んだ。

このような政治状況の下、白居易は元和四年（八〇九）に「論太原事状三件」を上奏した。この「太原」とは、当時太原に拠点を置いていた河東節度使をさす。唐代の河東道は、国都長安や東都洛陽と近いだけでなく、北方の遊牧民族がいるモンゴル高原とも接していた。八世紀初めより突厥の侵入が激化すると、その対策として、唐朝は河東北部にも多数の軍や守捉兵を配置し、景雲二年（七七一）には、諸軍を統轄するために太原を治所とする節度使を設置

し、開元六年（七二八）に河東節度使が成立したのである。しかし、安史の乱後、河東節度使には対北方防衛の拠点としての役割の他に、中央に対して半独立傾向を示す河北・河南藩鎮の経略の拠点という、新たな役割が加わった。その結果、国都長安を防衛する拠点としての河東節度使の重要性に対する、朝廷の評価・認識が高まり、朝廷は節度使の選任を重視した。一方、安史の乱後の河東軍の特徴として、節度使と諸将との間に潜在的な緊張関係が存在することが挙げられる。そのため、藩帥が交替した時にこのような緊張関係や葛藤が顕在化し、宝応元年（七六二）と大暦三年（七六八）の二回の軍乱につながった。そのため、朝廷が河東の藩帥の選任に気を配り、その藩政に対する警戒を怠らなかつた。それと関連して、中央より派遣された監軍である宦官が藩政に深く関与した。藩鎮のお目付け役である監軍については、地方藩鎮を統制する機能があるとの指摘があるが、実際に監軍が藩帥交替時に発生が予想される軍乱を未然に防いだ事例もあり、監軍が朝廷の対藩鎮政策を実現させるべく活動していることがわかる。

白居易「論太原事状三件」に見える人名は、いずれも元和四年当時の河東の藩帥と監軍である。嚴綬は貞元十七年（八〇二）から藩帥となっていたが、白居易ら数名の官僚

からの批判を受け、元和四年に交替させられた。また、范希朝は嚴綬の二代後の藩帥であるが、わずか一年で交替となっている。輔光とは、李輔光のことである。新田西『唐書』に列伝はないが、彼の墓誌によれば、貞元十一年（七九五）に監軍となり、病に倒れた藩帥の李説に代わって藩政を掌握し、以後、四代十五年にわたって藩政支配を続けた人物である。白居易の「論太原事状三件」は、宦官李輔光による藩政支配を終わらせ、また李輔光に藩政を任せきりにしていた嚴綬から別の人物を藩帥に選ぶよう求めたものである。もう一人の「貞亮」とは、劉貞亮のこと、憲宗擁立に功績があった宦官である。「論太原事状三件」によれば、李輔光の後任として、彼が河東節度使の監軍の候補に挙げられていたことがわかる。